



WHITEPAPER 2026

医療機関 DX 入門 2026 — 急がず、確実に進めるために

「何から手をつけるべきか」に迷う医療機関のための、現実的な DX と AI 活用の手引き。

MEDICT, INC. (株式会社メディクト) / Healthcare ICT & AI

目次

1. なぜ今、医療機関に DX が必要なのか
 2. よくある誤解:「DX=全面刷新」ではない
 3. 生成 AI の現実解:使うのではなく、使いこなす
 4. データを「使える形」に整える
 5. はじめの一步:小さく始めて検証する
-

1. なぜ今、医療機関に DX が必要なのか

人手不足、記録業務の負担、患者対応の多様化。医療現場の課題は年々重くなっています。ICT と AI は、その負担を軽くする現実的な手段になりつつあります。

重要なのは、技術を導入すること自体が目的ではない、という点です。DX のゴールは **現場が今より少し楽になり、患者により良い医療が届くこと**。本資料では、過剰な期待にも過度な警戒にも傾かず、地に足のついた進め方を整理します。

2. よくある誤解:「DX=全面刷新」ではない

DX という言葉は、しばしば大規模なシステム刷新を連想させます。しかし医療機関にとっての現実解は、多くの場合その反対側にあります。

レガシーは「負債」ではなく「資産」

長年使われてきたシステムには、現場の業務知識が染み込んでいます。それを一掃する刷新は、コストが大きいだけでなく、**移行期間中に現場が混乱するリスク**を伴います。まず既存システムを資産として捉え、本当にボトルネックになっている箇所だけを優先的に改善する——その判断から始めるべきです。

ポイント:新旧両方の技術を扱えるパートナーを選ぶこと。古い仕組みを正しく読み解けるからこそ、無理のない移行計画が描けます。

3. 生成 AI の現実解:使うのではなく、使いこなす

2026 年、医療現場で問われているのは「AI を導入するか否か」ではなく、「どこまで AI に任せ、どこから人が担うか」です。

効果が出ている使い方

- 長大なカルテ・文献からの要約と要点抽出
- 問い合わせや記録の下書き生成(最終確認は人が行う)
- 大量データの分類・整理による検索性の向上

いずれも、最終的な意思決定は人が握ったまま、その手前の負荷を AI が引き受ける構図です。医療は誤りが許容されにくい領域だからこそ、できることとできないことを正直に線引きする設計が欠かせません。

AI が外したときに人が気づける運用を前提に設計する。医療領域では、この誠実さが信頼の土台になります。

4. データを「使える形」に整える

AI を活かすにも、業務を改善するにも、土台となるのはデータです。しかし現実のデータは、複数の場所に分散し、表記も揃っていません。これを名寄せして整え、実用的に扱える形にする工程(データ統合)が、DX の隠れた要になります。

私たち MEDICT は、公的データ・オープンデータ・地理情報を統合し、大規模なデータベースを構築・運用してきました。一例として、医療機関データの統合では次の規模を実現しています。

112,000+

統合した医療機関データ(件)

47/47

カバー都道府県

約 55%

住所情報の付与率

※ 厚生労働省 医療機能情報提供制度 + OpenStreetMap + 国土地理院 Geocoding を統合。数値は自社管理データの検証済み実数(2026 年 6 月時点)。

5. はじめの一步:小さく始めて検証する

最後に、実際の進め方を 4 ステップで整理します。派手ではありませんが、**現場の業務を止めずに前へ進める**確実な方法です。

1. 現状業務を可視化し、課題を構造化する
2. 効果が見込め、かつ安全に試せる範囲を特定する
3. 小さく実装し、現場で検証する
4. 効果を確認してから、次の範囲へ広げる

新しい仕組みと既存の仕組みをしばらく併走させ、十分に検証できてから切り替える。医療という止められない現場では、この慎重さが価値になります。

ご相談ください。「何から手をつけるべきか」の整理から、技術選定に中立な立場でお手伝いします。

MEDICT, INC. / info@medict.co.jp / www.medict.co.jp